



◆固形墨 VS 液体墨

筆者は探訪ルポの取材において奈良市の墨屋を訪問したが、その際に「墨と墨液には大きな違いがある」というご主人の言葉が非常に印象に残った。我々が小学生の頃、書写の授業においては墨ではなく墨液を使用して字を書いていたことを思い出したからである。そこで、固形墨と液体墨はいったいどのような点が異なっているかを比較形式で明らかにしていきたい。固形墨については宮坂和雄氏の研究（宮坂、1965・1972）と奈良製墨組合のホームページを参考にし、液体墨については製造メーカー各社のホームページを参照した。

固形墨	比較項目	液体墨
806年 日本で最初の固形墨が 興福寺二諦坊で作られる	日本における 発祥	1898年 最初の液体墨といわれる 「開明墨汁」の誕生
煤（松煙または油煙） 膠 香料	原料	カーボンブラック（炭素） 膠または合成樹脂 香料 塩化カルシウム 水 凍結防止剤 防腐剤
空海が唐から筆と共に製法を 持ち帰ったと言われている	開発のきっかけ	習字の時間に墨をする手間 を省くため （開明株式会社・墨汁）
奈良（9割以上） 三重	製造元	開明株式会社 株式会社呉竹 など
職人の手作り	製造方法	機械で大量生産
保存環境を整えれば長期保存 が可能（50年～100年） 磨ったもの ・夏場8～9時間 ・冬場1日	保存可能期間	室温で3年 冷暗所で5年

墨の色が変化し、 独特の味が出る (墨に5彩あり)	利点	すぐに書くことができる 一定の濃度を保てる
濃く磨るのに時間がかかる 高価	欠点	墨が散ったり流れたりする 色に変化がなく、味がでない

◆考察

固形墨のうち松煙墨の製法は唐からが持ち帰られた。一方、油煙墨は寺で盛んに精製されたが、これは寺内での灯りが関係している。古くは油に紙をひたしろうそくとしていたが、その際に発生した煤が寺の内部に付着している様子から墨づくりへの発想が生まれたという説がある。現在つくられている墨の大半は、この油煙墨である(宮坂、1972: 82)。液体墨は墨汁や墨滴として知られている。元々小学校の教師をしていた開明株式会社創設者の田口精爾氏が、書道の時間に墨を磨る生徒を見て発起したという。液体墨が発明されたことで、書道の簡便性は飛躍的に向上したといえる。

だが今でも固形墨の使用が続いているのは、単に「字を書く」のではなく「書道」という文化があるためであろう。書道においては、墨を磨る工程自体もただの準備ではなく、書を書くことの一環として重んじられており、そこに価値を見出す人も多くいるのだ。また、一定の濃さで、すぐに書くことに優れている液体墨と、書き手によって墨の味が変わることや色の変化を楽しむ固形墨とではその用途が違ってくる。

液体墨は改良が重ねられたことで、当初の「筆をいためる」「匂いが良くない」といった欠点は解消されてきているが、それでも固形墨がなくなることはないだろう。使用用途に合わせて、固形墨と液体墨は共存していくと考えられる。

【参考資料】

宮坂和雄、1965、『墨の話』、木耳社

宮坂和雄、1972、『墨と色材の知識』、木耳社

奈良製墨組合 <http://www.sumi-nara.or.jp/index.html>

錦光園 <http://www5.ocn.ne.jp/~narazumi/>

開明株式会社 HP <http://www.kaimei1898.com/index.php>

株式会社呉竹 HP <http://www.kuretake.co.jp/index.html>

奈良女子大学文学部人文社会学科文化メディア学コース編
(2012年度後期「文化社会学演習」報告書)

『文房具—ぶんぐ大学への招待—』

2013年8月12日発行

編集・発行 奈良女子大学文学部 人文社会学科
文化メディア学コース (小川研究室)

〒630-8506 奈良市北魚屋西町 電話&FAX 0742-20-3259
E-mail ogawax@dream.com

印刷 株式会社 実業印刷